

【報 告】

学内代替実習における慢性期看護学実習の学習効果と課題

池上 理子, 畠田 理佳

京都先端科学大学 健康医療学部 看護学科

Learning Effects and Challenges of Chronic Nursing Practice on Campus

Michiko IKEGAMI, Rika SHIMADA

Department of Nursing, Faculty of Health and Medical Sciences, Kyoto University of Advanced Science

要 旨

目的：学内で実施した慢性期看護学実習を評価し、開発したプログラムの学習効果と今後の課題を明らかにする。

方法：慢性期看護学実習の学内プログラムに参加した学生10名の実習記録から学んだ内容に関する記述を抽出し、内容分析の手法を用いて分析した。

結果：【看護実践に備えて知識を得る】【身体状態を的確に観察し評価する】【苦痛に対応する】【安全を守る】【患者の思いに配慮して対応する】【自己管理を促進できるように支援する】【多職種で協力して支援する】という7つのカテゴリー（概念）が抽出された。

考察：学生の学びに関する概念は臨地実習の実習目標に対応しており、開発した学内実習プログラムの運用により学生は実習目標を一定程度達成することができたと評価できる。一方で、患者の反応に応えながらのコミュニケーション、看護職や他職種の連携や協働に基づく実践に関して、学内実習におけるリアリティの限界は今後の課題となった。

キーワード：代替実習、慢性期看護学実習、学生の学び、学習効果、実習評価

Key words: Alternative Practice, Chronic Nursing Practice, Student Learning, Learning Effects, Practice Evaluation

I はじめに

看護基礎教育について定めた文部科学省の指定規則により、成人看護学では6単位の臨地実習が義務づけられている。この規則に則り、本学看護学科成人看護学領域では、急性期看護学実習3単位（3週間：計135時間）および慢性期看護学実習（以下、慢性期実習）3単位（3週間：135時間）を実施している。

2019年12月以降のCOVID-19感染症の世界的広がりのなか、2020年2月に厚生労働省より、臨地実習施設の確保に困難が生じている状況を鑑み、「実

状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識および技能を習得することとして差し支えない」旨の指針¹⁾が示された。同年9月から開始した本学の慢性期実習は、各実習施設の感染予防対策の方針に沿う形で臨地・学内・遠隔（インターネットを介したオンライン上での実習）の3形式を組み合わせた複数の実習形態プログラムを実施した。さらに12月に入り感染の再拡大によって実習受け入れを全面的に中止する施設がみられたことで、我々は厚生労働省の指針に基づき3週間全期間を学内実習とする独自プログラムを開発した。

本学では慢性期実習の目的を「慢性的な疾患および終末期の対象者とその家族の病気に伴う体験を理解し、セルフケア能力を高め、今後の生活を再構築していくことを支援する上での看護実践能力を養う。」こととしている。学内実習の独自プログラム（以下、本プログラム）の開発に際しては、『看護学教育モデル・コア・カリキュラム』²⁾や『看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標』³⁾の提示する発達段階の特徴および健康の段階に応じた看護実践の学修目標に基づき、慢性期実習の目的・実習目標が達成できることを前提として考えた。特に、臨地実習でなければ到達が難しい目標は何か、学習項目を学内において実施する課題にどう組み込めばリアリティの高い実習となるのかということについて教員間で検討し決定した。

2020年8月時点での全国の看護系大学への実態調査⁴⁾では、臨地実習の実施状況として74.1%が「臨地において実習ができず、学内実習に変更して実施」と回答し、「予定通りの実施」1.9%、「計画を変更して臨地で実施」18.8%を大きく上回った状況が明らかとなった。この調査からも、多くの大学が当初の実習目的・実習目標の達成のための実習目標の読み替え、遠隔実習および学内実習の構築を行ったことが伺える。そして、2021年3月頃より複数の看護系大学から遠隔や学内における代替実習の実践報告^{5, 6)}がみられるようになったが、その多くは遠隔授業における新たな教育ツールの開発やシミュレーション教育の充実などによる実習プログラムの実施と学生の学習状況の報告に留まっており、プログラムを評価し学習効果を明示したものは少ない。また、『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』⁷⁾は、「学修の成果を学修者が実感できる教育の整備とこれらの教育が行われていることを確認できる質の保証」を求めており、我々もそれに応える教育の実践とその評価を行う必要があると考

えた。

そこで本研究では、本プログラムで実施した慢性期実習を評価し、学習効果と今後の課題を明らかにすることとした。

Ⅱ 学内実習プログラムの概要

本プログラムの開発に際しては、臨地実習の5つの実習目標（表1）を達成できる課題設定とスケジュールを目指した。

1. 模擬事例

模擬事例は過去の慢性期実習を参考に2例の模擬事例を作成した。1例目は入院から退院までの全期間における看護に関する課題を展開することを目的として糖尿病性腎症による加療（インスリン療法導入・シャント造設・下肢末梢動脈の血管内治療）を必要とする患者、2例目は教育支援に関する課題を展開することを目的として糸球体腎炎の増悪に対してステロイド大量療法を受ける患者とした。

2. 教育用電子カルテの活用

学生が必要な情報を意図的に収集してアセスメントすることにより、臨地実習と同様の看護過程を体験できるように、模擬事例の情報は教育用電子カルテ『Medi-EYE』に記載し、学生に提示した。

学生が電子カルテにアクセスできる時間は、臨地実習時間に合わせ8時30分～16時00分とした。

3. 実習スケジュールと課題設定

実習目標をいずれかの課題および実習態度で達成できるように各実習目標および到達目標と各課題とを照合し、課題の内容を吟味した。

本プログラムの3週間スケジュールと課題および実習方法、それらと実習目標の対応を表2に示す。課題は午前と午後に1つずつとし、各課題ではカンファレンスあるいは振り返りにより学びを統合する十分な時間を設定した。

表1. 慢性期看護学実習の実習目標

1. 慢性的な疾患をもつ対象者とその家族への関わりを通して、信頼関係を築き、身体的・心理的・社会的側面から総合的に理解できる
2. 慢性的な疾患をもつ対象者とその家族が、生活との折り合いをつけながら、病気とともに生きるために必要なセルフケアへの支援について考えることができる
3. 慢性期看護に必要な基礎的知識を活用しながら看護過程を展開し、個別性を重視した看護実践ができる
4. 慢性的な疾患をもつ対象者とその家族の援助を通して、他職種との連携のあり方を理解し、チームメンバーの一員としての自覚を持つことができる
5. 慢性期の看護実践を振り返り、看護専門職者としてのあり方や看護観を深め、自己の学びと課題を明確にすることができる
6. 倫理的に配慮した看護実践ができる

表 2. 学内実習プログラムの課題と実習方法および対応する実習目標

実施日	課題テーマ	実習方法	実習目標 1	実習目標 2	実習目標 3	実習目標 4	実習目標 5	実習目標 6
			患者の 全体像把握	セルフケア 支援	看護過程 の展開	多職種連携 チーム医療	慢性期看護 の役割	看護専門職 者の態度
実習 2 日目 午前・午後	看護過程 - 情報収集	個人ワーク カンファレンス	○		○			○
実習 3 日目 午前	状況設定 1 -VS 測定と観察 [入院 2 日目 10 時]	教員との 実技確認	○		○			○
実習 3 日目 午後	教育支援計画 1 -インスリン自己注射を導入する患者	個人ワーク カンファレンス	○	○	○	○	○	○
実習 4 日目 午前	閉塞性動脈硬化症の検査と看護	実技 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 4 日目 午後	状況設定 2 -緊急時の看護	実技 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 5 日目 午前	教育支援 1 -インスリン自己注射を導入する患者	ロールプレイ カンファレンス	○	○	○	○	○	○
実習 5 日目 午後	看護過程カンファレンス 1 -看護の方向性、看護問題	個人ワーク カンファレンス	○		○		○	○
実習 6 日目 午前	状況設定 3 -シャント造設術を受ける患者の看護	実技 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 6 日目 午後	看護過程カンファレンス 2 -看護計画	個人ワーク カンファレンス	○		○		○	○
実習 6 日目 午後	状況設定 4 -VS 測定と観察 [入院 5 日目 10 時]	実技テスト	○		○			○
実習 7 日目 午前	状況設定 5 -シャント管理の看護	実技 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 8 日目 午前	教育支援計画 2 -ステロイド大量療法を受ける患者	個人ワーク カンファレンス	○	○	○	○	○	○
実習 8 日目 午後	グループワーク 1 - 心理・社会的支援	ロールプレイ 振り返り	○	○	○		○	○
実習 9 日目 午前・午後	看護過程の整理、教育支援の準備	自己学習 個人指導	○	○	○	○	○	○
実習 10 日目 午前	グループワーク 2 - 自己管理①- 飲水制限	ロールプレイ 振り返り	○	○	○		○	○
実習 10 日目 午後	グループワーク 3 - 自己管理②- 服薬管理	ロールプレイ 振り返り	○	○	○		○	○
実習 11 日目 午前	教育支援 2 -ステロイド大量療法を受ける患者	ロールプレイ 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 11 日目 午後	状況設定 6 -血管内治療を受ける患者の看護	実技 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 12 日目 午前	グループワーク 4 - 家族看護	ロールプレイ 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 12 日目 午後	状況設定 7- フットケア	実技 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 13 日目 午前	状況設定 8 -VS 測定と観察 [入院 13 日目 10 時]	実技テスト	○		○			○
実習 13 日目 午後	多職種連携とソーシャルサポート	個人ワーク カンファレンス	○	○	○	○	○	○
実習 14 日目 午前	教育支援 3 -シャント造設患者の退院支援	ロールプレイ 振り返り	○	○	○	○	○	○
実習 14 日目 午後	最終カンファレンス -慢性期における看護師の役割	カンファレンス					○	○
実習開始後 30 分間	毎日の VS 測定と観察	ペアワーク	○		○	○		○
実習開始後 2 週間以内	看護過程 - 看護アセスメント～看護計画立案	個人ワーク 個人指導	○		○		○	○
教育支援 3 まで	教育支援計画 3 -シャント造設患者の退院支援	個人ワーク 個人指導	○	○	○	○	○	○
実習最終日 まで	最終レポート -慢性期における看護師の役割	個人ワーク					○	○

注 1) 実習目標欄の○印は各課題で達成が期待される実習目標を示す

注 2) 実習 1 日目（オリエンテーション・技術練習）、15 日目（記録のまとめ・面談）は臨地実習同様に実施

Ⅲ 研究方法

1. 研究デザイン

記述的研究

2. 研究対象

2020・2021年度慢性期実習受講生（2020年度総数67名・2021年度総数56名）の中で、学内実習となり本プログラムを受講した14名

3. 研究期間

2022年4月～10月

4. データ収集方法

学生の実習記録の中から、学生が「…考えた、感じた、思った、実感した、学んだ」など、日々の課題の達成状況と実習を通しての学びを明記している意味のある一文を抽出した。

5. データ分析方法

抽出した一文をコード化した。続いて、これらのコードの類似性・相違性に従ってカテゴリー化した。

この一連の分析過程は、研究者2名がお互いの分析した結果を照合しながら決定していった。

6. 用語の定義

代替実習：指定規則に定められている臨地での実習に代わる方法により行われる実習

学内実習：臨地実習、代替実習に関わらず、

実習期間中に大学の実習室あるいは教室に学生が登校し、教員と対面で行う実習

7. 倫理的配慮

研究対象の実習記録の使用について、学生に本学の学生用ポータルサイトもしくは対面で研究協力を依頼した。研究目的と研究方法、研究参加の自由意志、研究参加の同意の有無による人物像の評価や成績などへの不利益な取扱いがないこと、研究に関する情報公開の方法、データの匿名性の確保について、紙面で説明したうえで同意を得た。学生の学びの記述は個人が特定できる情報は一切収集せず、連結不可能な匿名化データとした。

本研究は京都先端科学大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：21-9）を得て実施した。

8. 利益相反

当研究において開示すべき経済的利益相反はない。

Ⅳ 結果

1. 学内実習の実際

本プログラムに基づく3週間の学内実習の実施内容を実習目標に沿って表3に示す。前日の夕方に翌日の課題についてガイダンスをおこない、学生は各課題に必要な準備をして実習に臨んだ。

2. 分析対象

研究対象である学生14名のうち10名の研究参加への同意が得られ、この10名の実習記録を分析対象とした。

表3. 学内実習の内容

実習目標	実施した実習内容
1. 患者の全体像把握	・状況設定課題（バイタルサイン測定と観察、検査や治療における看護、教育支援のロールプレイ）での患者体験
2. セルフケア支援	・2模擬事例の教育支援計画の立案：学生カンファレンスでの意見交換や教員の助言を参考に個人ワーク ・教育支援：ロールプレイでの実施と振り返り ・グループワーク：セルフケアに関する課題をラウンド・ロビンで検討 ※注3
3. 看護過程の展開	・看護アセスメント～初期計画立案：学生カンファレンスでの意見交換や教員の助言を参考に個人ワーク ・看護問題抽出と看護計画：学生カンファレンスでの意見交換や教員の助言を参考に個人ワーク ・状況設定場面での看護実践に対するSOAP記録 ・バイタルサイン測定と観察：実践とフィジカルイグザミネーションのペアワーク ・検査や治療における看護：看護計画あるいは臨床判断に基づいた看護実践の実施
4. 多職種連携とチーム医療	・多職種連携とソーシャルサポートの検討：個人ワークと学生カンファレンス ・学生メンバーによる協同学習：各課題の運用や学生カンファレンス
5. 慢性期看護の役割	・最終レポート：慢性期における看護師の役割（自己の実践を振り返って）
6. 看護専門職者の態度	・実習態度：身だしなみや他者への敬意ある態度など看護専門職を目指す者としての節度ある行動、健康管理、学習者としての真摯な姿勢、協同学習への協力と専心

注3) 服薬管理など対象に必要なセルフケア項目毎に実践方法のアイデアを学生が公平に順に提示することを繰り返し焦点化・具体化していくワーク

3. 学生の学び

10名の学生の実習記録をデータとして205のコードを抽出した。それらを分析した結果、47サブカテゴリー、7カテゴリーが得られた(表4)。

7個のカテゴリーは、【看護実践に備えて知識を得る】【身体状態を的確に観察し評価する】【苦痛に対応する】【安全を守る】【患者の思いに配慮して対応する】【自己管理を促進できるように支援する】【多職種で協力して支援する】であった。以下に各カテゴリーについて説明する。尚、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》，コードは「」で表記する。

(1) 看護実践に備えて知識を得る

このカテゴリーは、《解剖生理・病態を理解する》《薬物療法を理解する》《多職種とソーシャルサポートを理解する》《社会保障制度を理解する》《患者に説明する前に自分が良く理解する》という5個のサブカテゴリーから構成された。

学生は、患者の身体状態を把握するために「臓器の機能や疾患の機序を理解する」ことを始めとし治療の効果や副作用についての自己学習が不可欠であること、患者の自己管理の支援においても「シャントの仕組みを説明できるように勉強する」など自己学習が必要であると学んでいた。

(2) 身体状態を的確に観察し評価する

このカテゴリーは、《情報収集から現在の病態を理解する》《多角的に情報収集し患者理解を深める》《患者に必要な観察項目を考える》《症状の機序を考えて観察する》《症状に応じて観察する》《合併する疾患全体を考えて観察する》《治療内容に応じて観察する》《各症状を詳細に確認する》《客観的に観察する》《患者の苦痛を具体的に確認する》《病態や治療に基づきアセスメントする》《観察の技術を磨く》《報告は系統立てて行う》という13個のサブカテゴリーから構成された。

学生は、「自覚症状を具体的に聞く」ことと並行して客観的に観察し「根拠と機序を考えて症状を確認する」こと、観察項目を整理し「触知部位を確認して実施する」など適切な方法で観察すること、系統的に評価し報告することを学んでいた。

(3) 苦痛に対応する

このカテゴリーは、《苦痛に配慮して観察する》《苦痛を緩和するケアを実施する》《不安についてアセスメントする》《不安を緩和するケアを実施する》という4個のサブカテゴリーから構成された。

学生は、患者の症状緩和に取り組むこと、「治療上必要な安静も患者にとっては苦痛となる」こと、「言葉にしない患者の不安をアセスメントする」ことで心理社会的苦痛について考え対応することを学んで

表 4. 学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
看護実践に備えて知識を得る	解剖生理・病態を理解する
	薬物療法を理解する
	多職種とソーシャルサポートを理解する
	社会保障制度を理解する
	患者に説明する前に自分が良く理解する
身体状態を的確に観察し評価する	情報収集から現在の病態を理解する
	多角的に情報収集し患者理解を深める
	患者に必要な観察項目を考える
	症状の機序を考えて観察する
	症状に応じて観察する
	合併する疾患全体を考えて観察する
	治療内容に応じて観察する
	各症状を詳細に確認する
	客観的に観察する
	患者の苦痛を具体的に確認する
	病態や治療に基づきアセスメントする
	観察の技術を磨く
	報告は系統立てて行う
苦痛に対応する	苦痛に配慮して観察する
	苦痛を緩和するケアを実施する
	不安についてアセスメントする
	不安を緩和するケアを実施する
安全を守る	安全・安楽なケアを実施する
	緊急時は患者の安全を最優先に考える
	危険防止について患者に説明する
	手術室や検査室では確実な情報伝達を行う
患者の思いに配慮して対応する	信頼関係の構築を大切にする
	患者が話しやすい雰囲気をつくる
	患者が答えやすい工夫をする
	患者の思いに耳を傾ける
	患者の立場になって観察する
	患者が安心できるケアを実施する
	ボディ・イメージを考え発言する
自己管理を促進できるように支援する	自己管理能力を確認する
	患者のニーズに合う自己管理方法を検討する
	自己管理の具体的な方法を伝える
	自己管理の必要性を理解できるように支援する
	自己管理の効果を実感できる介入をする
	自己管理を継続できるように支援する
	自己管理に家族の協力が得られるように調整する
	わかりやすい資料を作成する
	教育支援は時間配分を考えておこなう
	説明は聞きやすくわかりやすく行う
多職種で協力して支援する	ひとりの患者を多くの職種が支援する
	患者に合う専門職やソーシャルサポートを提供する
	多職種が情報共有しチームで支援する
	多職種が専門的視点から支援する

いた。

(4) 安全を守る

このカテゴリは、《安全・安楽なケアを実施する》《緊急時は患者の安全を最優先に考える》《危険防止について患者に説明する》《手術室や検査室では確実な情報伝達を行う》の4つのサブカテゴリから構成された。

学生は、「疼痛に配慮しながらも安全を図る」など安楽と安全の両立を考えることや、「危険行為を患者に伝え防止する」など教育的介入によって安全確保を最優先とすることを学んでいた。また、治療室には患者氏名や治療内容など確実な情報共有を行うことが不可欠であると学んでいた。

(5) 患者の思いに配慮して対応する

このカテゴリは、《信頼関係の構築を大切にす》《患者が話しやすい雰囲気をつくる》《患者が答えやすい工夫をする》《患者の思いに耳を傾ける》《患者の立場になって観察する》《患者が安心できるケアを実施する》《ボディイメージを考え発言する》という7個のサブカテゴリから構成された。

学生は、患者が話しやすい態度で接することや回答が容易な質問をすること、「患者に負担をかけない方法でケアを実施する」など患者の立場に立って実践すること、さらに「患者がシャントに抱く思いに配慮する」などボディイメージへの影響を考えた慎重な発言を行うことを学んでいた。

(6) 自己管理を促進できるように支援する

このカテゴリは、《自己管理能力を確認する》《患者のニーズに合う自己管理方法を検討する》《自己管理の具体的な方法を伝える》《自己管理の必要性を理解できるように支援する》《自己管理の効果を実感できる介入をする》《自己管理を継続できるように支援する》《自己管理に家族の協力が得られるように調整する》《わかりやすい資料を作成する》《教育支援は時間配分を考えて行う》《説明は聞きやすくわかりやすく行う》という10個のサブカテゴリから構成された。

学生は、患者と共に自己管理に関する課題を焦点化し継続可能な自己管理方法を吟味すること、「妻の生活についても情報収集する」ことで家族を支援し協力を得ること、さらには、資料の工夫や説明時の態度など効果的な支援に繋がる方法についても学んでいた。

(7) 多職種で協力して支援する

このカテゴリは、《ひとりの患者を多くの職種が支援する》《患者に合う専門職やソーシャルサポートを提供する》《多職種が情報共有しチームで支援する》《多職種が専門的視点から支援する》の4個

のサブカテゴリから構成された。

学生は、「ひとりの患者に多職種が関わり入院から退院まで支援する」「患者の情報を共有し目標のもとにそれぞれの立場から支援する」など多職種によるチーム医療の重要性を学んでいた。

V 考 察

学生の実習記録から抽出された7つの学生の学びから、本プログラムの学習効果および今後の課題について、以下に検討していく。

1. 本プログラムによる学習効果

(1) セルフケア能力の獲得を支援する看護実践力の向上

慢性疾患患者のセルフケア能力を促進する支援は、本実習の重要な目標（主に実習目標2・3）のひとつである。この目標に対応するように、学生は【身体状態を的確に観察し評価する】ことによって患者の健康問題とセルフケア課題を同定し、【自己管理を促進できるように支援する】ことを学んでいた。学生は臨地実習を通して、「病と共に生きる」とは慢性疾患患者が必要な治療や健康行動を生活に取り入れて生活を再構築することと理解するようになる⁸⁾。本研究において確認された自己管理の促進に関する学びは、病と折り合いをつけ自分らしい生活を模索している段階にある患者を支援するうえでの重要な視点で構成されており、我々の学生も同様の患者理解ができていたと評価できる。

また、学生は「教育支援は患者のニーズに応える内容とする」「患者が自分でできる良い方法を思いつくまで時間をかける」など患者自ら選択し決定していく支援について学んでいた。ノールズが提唱したアンドラゴジーの特徴は、①自己決定的な存在の志向、②豊かな資源としての経験の活用、③学習へのレディネスは発達課題である社会的役割、④過去の学びの即時的な応用、⑤課題達成中心の学習である⁹⁾。看護演習において学生が成人期の特徴を踏まえた教育支援を実施することは難しいとする報告¹⁰⁾もあるが、本プログラムの学生はアンドラゴジーの視点に着目した支援方法を学ぶことができていたといえる。さらに学生は、「患者が行動の効果を実感し継続可能と思えるように関わる」など自己効力感を高める支援やエンパワーメントできる支援といった成人患者のセルフケア支援における重要な概念を学んでいたことも評価できる。これらの学びには、社会的役割を担う2例の模擬事例のセルフケアに関連する複数の課題が一助となったと考える。

(2) 看護観・倫理観の醸成、看護専門職者の態度の獲得

疾病や治療に対する患者の苦痛や思いを知り、学生は【患者の思いに配慮して対応する】【苦痛に対応する】【安全を守る】という看護において不可欠な対象者中心の姿勢、苦痛緩和と安全の保証について学んでいた。学生は看護師のどのような態度や技術が患者の感情に影響を与えるのか考え、看護実践における基本的な態度を身につけていた。Kolbは個人の経験からの学びの過程を①具体的経験、②内省的な観察、③抽象的概念の形成と一般化、④新しい状況への応用という4つのプロセスで構成されるサイクルモデルとして示した¹¹⁾。看護演習における患者体験はこのサイクルモデルに照らすと「具体的経験」および「内省的な観察」のプロセスに該当した¹²⁾という報告もある。一方で我々が実施した学内実習プログラムでは、患者役の経験をその都度丹念に振り返ることで、この経験は「内省的な省察」に留まらず対象者中心を基盤とした看護観や倫理観を醸成し、看護専門職者の態度を獲得する「抽象的概念の形成と一般化」のプロセスに到達したといえる。また、場面を再現できる状況設定課題の利点を活かし看護実践を繰り返し検討することで、これらの態度を「新しい状況への応用」として、続く課題における看護実践にも活かしていくことができていたと考える。

(3) チーム医療に必要な協同する力の向上

多職種連携では、患者を中心した共通の目標の下に、各職種が互いの専門性を尊重し協働してより良い患者・家族支援を目指す。患者の退院支援を検討する課題を通じて、学生は【多職種で協力して支援する】ことを学んでいた。この学びは患者・家族を中心とした各専門職の役割と協働の在り方、およびソーシャルサポートの活用に関する大切な視点で構成されており、この学びに関する目標（主に実習目標4）は達成されたと評価できる。模擬事例の経過に沿った薬剤師・栄養士の介入記録や退院支援のカンファレンス記録を教育用電子カルテ内に含めたことにより、学生は他職種への関心と理解が促進され、この学びに結びついたと考える。

本プログラムでは、学生達が互いに看護実践を支援し合う方法を選択した。学生同士が他者の考えに触れる多くの機会を得られることは代替実習の一つの利点であり¹³⁾、本プログラムでも課題のカンファレンスでのシンク・ペア・シェアやラウンド・ロビン、状況設定課題でのロールプレイなどの協同学習技法による学生中心のアクティブラーニングを用いたことで、学生が互いの理解を深め支援し合う力を

育んでいったと考えられる。これらの経験もまた、看護チーム・多職種チームで協働していくことの大切さへの気づきに繋がったと考える。

2. リアリティの確保に向けての課題

臨地実習において、学生は患者や実習指導者など多くの医療専門職者との関係性や慣れない環境により実習へのモチベーションが左右される¹⁴⁾ように、臨床の場における人的および物的環境が学生に影響を与えることが臨地実習のリアリティである。本プログラムでは、これらのリアリティの点において検討すべきいくつかの課題が確認された。

(1) 生きたコミュニケーションと対象者理解の限界

臨地実習では言葉の情報のみではなく、日々患者が見せる表情やしぐさを含めた行動全般やベッド周辺のあらゆるものが、患者の人となりや生活者としての一面を理解することに繋がる。本プログラムでは、患者の人物像を学生がイメージできるように、教育用電子カルテや状況設定課題内に模擬事例の社会的背景や心理状態などに関する記述を含めたが、臨地実習で出会う生きた患者を再現することには限界があった。

また臨地実習において、学生は患者の状況や希望によって自分の思い通りに看護実践が進まないことも経験し、生活行動や生き方の変容に向けて、患者を支援することの難しさを実感する。この経験は学生が他者理解を深める貴重なきっかけとなるが、学内実習ではこの経験を再現することもやはり限界があり、学生を深い対象理解に導くには更なる検討が必要である。他大学の代替実習では模擬患者とのコミュニケーションは学生が直接的かつ非言語的情報収集を学ぶことに役立ち¹⁵⁾、本物同然の臨場感の中で対応できた¹⁶⁾ことが報告されている。このように模擬患者は対象者との関係性の構築を学ぶことができる有効なツールであり、その活用を今後検討していきたい。また、模擬事例と同病者の療養生活の思いを聴く機会や彼らの体験を描いた論文など書籍、あるいは動画教材をタイムリーに活用することも有用と考える。

(2) 看護専門職や他職種の生きた実践から学べる環境の不足

臨地実習において学生は、「誠実に患者へ向き合う看護師の態度、患者や家族一人ひとりに合わせた適切な看護実践、チームで協力し業務やケアを行う行動」をロールモデル¹⁷⁾となる看護師から学ぶ。学生の成長のために、代替実習であっても看護師から学ぶ機会を可能な限り設定することが望ましいと考える。他大学の学内実習¹⁸⁾で実施した実習施設との協力体制（看護活動の1日見学、入院患者の情報

を活用した看護過程の展開、リモートや指導者の来校による指導など）など大いに参考となる。本学のプログラムの各課題は教員が臨地実習指導の経験に基づいて作成したが、プログラム作成の段階から臨地の指導者の参画を得ることができれば、より臨場感のある課題作成が可能となると考える。また学内での実技を伴う課題の実践やカンファレンスの場に指導者が参加することは、リアリティの確保と同時に学生の看護の質を向上できる機会となると考える。今後、実習施設側の指導者・看護師との協働を調整していきたい。

また、臨地実習では学生は受け持ち患者に関わる様々な職種との交流や多職種カンファレンスの場を通じて、各職種の専門性を具体的に理解し、患者の療養生活が多方面から支援されていることを実感する。前述のように、チーム医療や多職種連携に関する一定の学びは達成できたと考えるが、これもまた実習施設の多様な専門職種に教育への協力を依頼できればよいと考える。その他多職種による臨床実践の動画教材¹⁹⁾、多職種カンファレンスのロールプレイ体験²⁰⁾などの活用も検討していきたい。

3. 学生の学びから確認された実習目標の達成状況

以上より図1に示す通り、本プログラムは学生を各実習目標の達成に一定程度導くことができたと評価する。リアリティの確保に向けた課題を残しながらも、ひとつひとつの課題を丁寧に実施し時間をか

けて看護実践を振り返る機会や学生同士で協同し課題の達成を成し得る機会は、本プログラムならではの利点であったといえる。同時に、本プログラムで培った課題作成および実習運用方法は今後の実習前演習においても活用可能であり、次年度以降の演習計画に反映させていくことが有用であると考えられる。

VI 結 論

1. 本プログラムによる実習を行った学生の実習記録からは、【看護実践に備えて知識を得る】【身体状態を的確に観察し評価する】【苦痛に対応する】【安全を守る】【患者の思いに配慮して対応する】【自己管理を促進できるように支援する】【多職種で協力して支援する】という学びを確認できた。

2. 本プログラムにより、学生の①セルフケア能力の獲得を支援する看護実践力の向上、②看護観・倫理観の醸成、看護専門職者の態度の獲得、③チーム医療に必要な協同する力の向上が確認できた。これにより本実習の実習目標を一定程度達成したことが評価できた。

3. 一方で本プログラムは、リアリティの確保に向けた①生きたコミュニケーションと対象者理解の促進、②看護専門職や他職種の生きた実践から学べる環境の保証における課題が明らかとなった。今後は実習施設との協働によりこれらの課題を解決していくことが必要である。

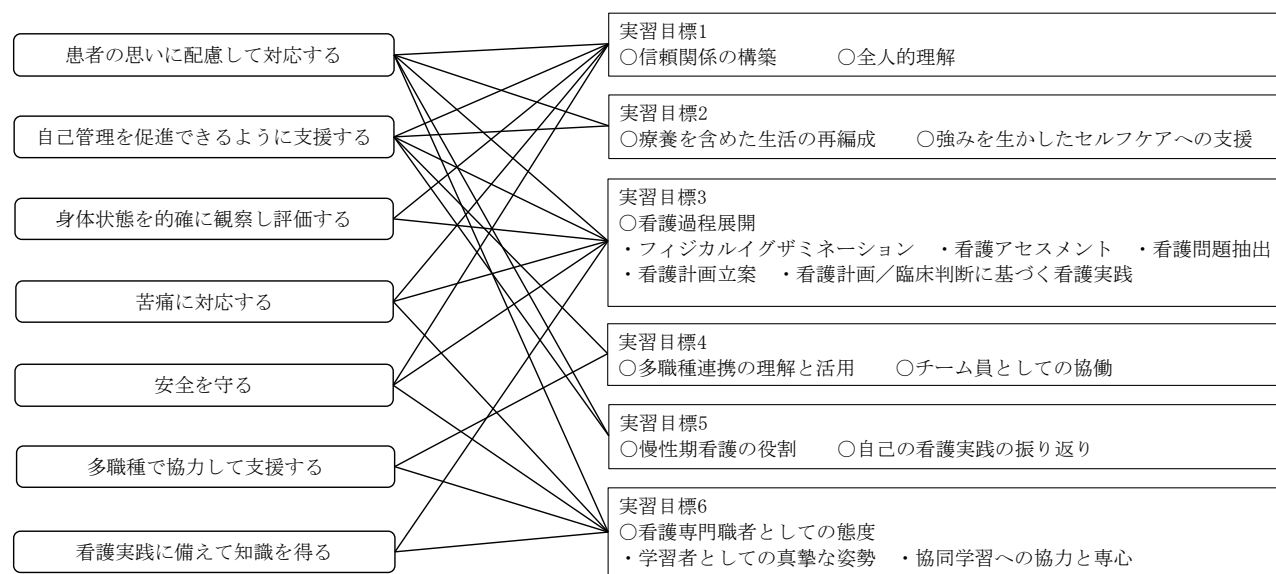


図1. 学生の学びと実習目標

謝 辞

本プログラムにおける実習記録の使用を快諾して下さった学生の皆様の協力に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所および養成施設等の対応について（周知）〔令和2年2月28日付事務連絡〕，2022.1.5.
(<https://www.mhlw.go.jp/content/000605026.pdf>)
- 2) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～〔平成29年10月〕，2022.1.5.
(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf)
- 3) 日本看護系大学協議会：看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標〔平成30年6月〕，2022.1.5.
(<https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>)
- 4) 日本看護系大学協議会：2020年度看護系大学4年生の臨地実習科目（必修）の実施状況調査結果報告書，2022.1.5. (<https://doi.org/10.32283/rep.598a3d11>)
- 5) 河野貴大，大山末美，兼子夏奈子，他：慢性看護学実習における遠隔実習プログラムの構築と実践．聖隷クリストファー大学看護学部紀要，29：77-84，2021
- 6) 大鳥和子，鈴木由紀子，駒井里枝，他：コロナ禍における成人看護学実習Ⅰ（慢性期看護実習）－臨地実習指導者と教員の協働による実習指導の取り組み 第1報－．了徳寺大学研究紀要，15：39-47，2021
- 7) 中央教育審議会：2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）〔平成30年11月26日〕，2022.1.29.
(https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf)
- 8) 平野文子，馬庭史恵：成人看護実習における看護学生の「病と共に生きる」患者の理解-セルフケアの視点からとらえた患者像．島根県立看護短期大学紀要，8：33-40，2003
- 9) Knowles.M.S.: The Model Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy, 1980. 堀薫夫，三輪健二監訳：成人教育の現代的実践－ペダゴジーからアンドラゴジーへ，33-67，鳳書房，2001
- 10) 中村織恵，本谷久美子，中井美鈴，他：成人慢性疾患患者のセルフケア支援の理解を深める演習方法の検討－グループワークによるレポートの記述内容を分析して－．東都医療大学紀要，6（1）：57-62，2016
- 11) Kolb,A.Y, Kolb,D.A.:Experiential learning theory: A Dinamic holistic approach to management learning, education and development. Armstrong,S.J.and Fukami,C. V. (eds) The SAGE handbook of management learning, education and development:42-68 SAGE,2009
- 12) 三上ふみ子，新田純子：看護学生の自己血糖測定技術演習からの学びの分析－患者役の経験から具体的な患者指導を導き出すプロセス－．青森中央学院大学研究紀要，26：29-37，2016
- 13) 入江亘，菅原明子，塩飽仁：遠隔授業による小児看護学実習の教育実践．日本看護研究学会雑誌，44（5）：697-706，2022
- 14) 石川恵子，内海桃絵：看護学生における臨地実習へのモチベーション．京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要：健康科学，11：11-16，2016
- 15) 伊藤加奈子，唐津ふさ：COVID-19流行下における成人看護学実習学内代替実習プログラムの評価．北海道医療大学看護福祉学部学会誌，18（1）：65-74，2022
- 16) 相撲佐希子，春田佳代，諏訪美栄子，他：劇団員模擬患者を活用したリアリティある実習への挑戦－Web会議システムを使った双方向型コミュニケーション－．看護教育，62（1）：56-61，2021
- 17) 三尾亜喜代，曾田陽子，小松万喜子：看護学生が認識する看護師の看護職者としてのロールモデル行動との理由．日本看護学教育学会誌，23（3）：31-45，2014
- 18) 大鳥和子，齋藤みどり：コロナ禍における成人看護学実習Ⅰ（慢性期看護実習） 第2報－学内実習を主体とした代替実習の効果－．了徳寺大学研究紀要，16：205-218，2022
- 19) 山本加奈子，加藤佐知子，森田敦子，他：聖路加国際大学－病院連携によるクリティカルケア領域の臨床実践の動画教材を活用したオンライン実習の試み．医学教育，52（2）：103-108，2021
- 20) 春田淳志，後藤道子，野呂瀬崇彦，他：オンラインでの多職種連携教育実践報告 第1報 初年次学生を対象とした教育的なインタラク션을促すオンラインの工夫．医学教育，52（1）：53-57，2021